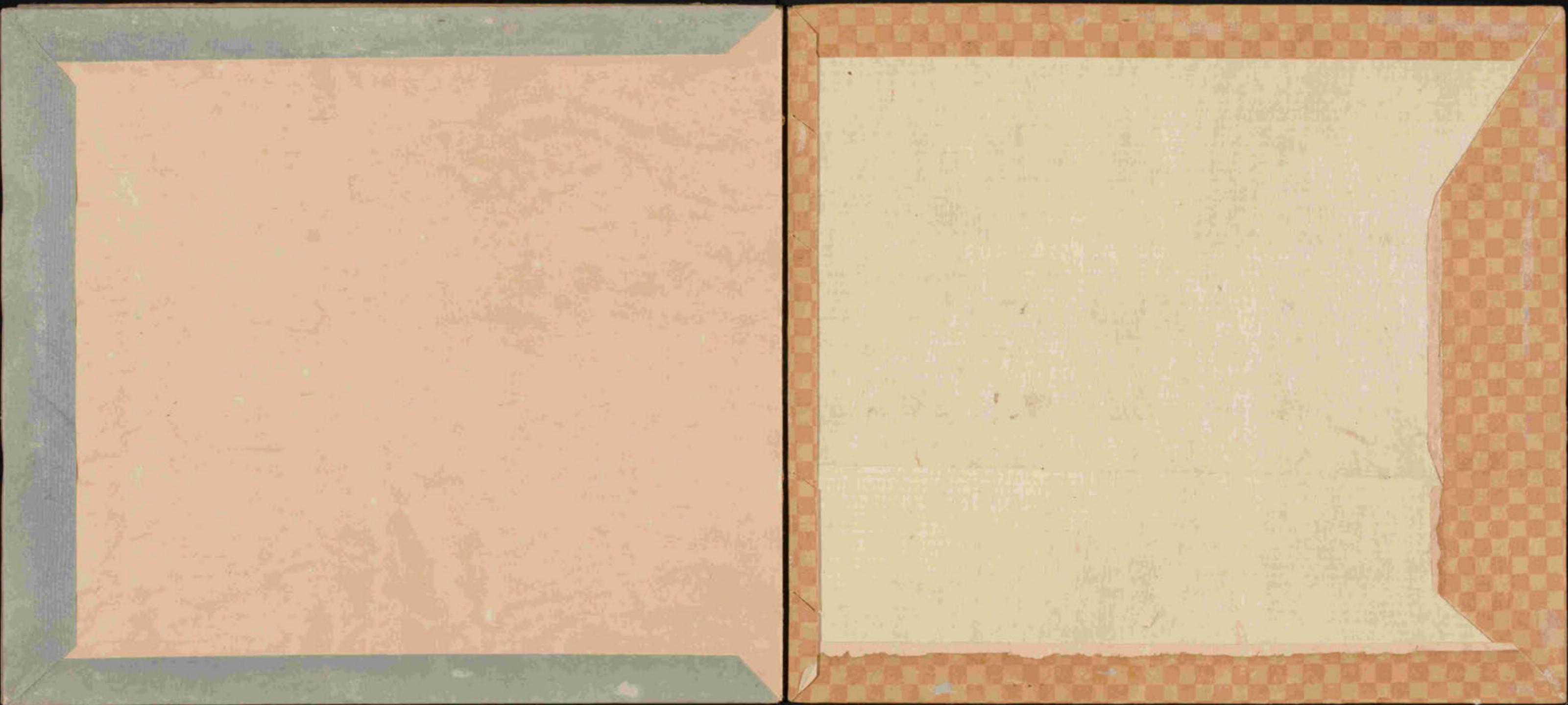


古今集序

第七註





古今和諧集序註第七

今れせすよしげく人わん
よさうりうちのひうすく
やれんいてとくふえおもか
ひるいのくはんくもあとて汝
うりあはくもくとくよあとく
うくまくわくはくよく
考心てくわく、きくわくよく
のくわくく、くわく時後
おとすくくわくわく中



もとより中傳より、もとより
りうちして實が奇のまされ
しもして實が奇のまされ
が奇のまされとぞはえとれを
くくして所理をかよつて
うむよと席を見上りて承
多在古賀之語、未耳月く既
往者教説之端、
すれ半ば通じてすとて文
はることくはんとくとくへ
で、其事よりとつて國と相
承國の風俗にて國と治り民と
國も事も、漢家めぐる
もくもくいきをひびき
國の言にも傳へてゐる
政もれりよ、兵士もりよ、國
地國の通事もりす、而て國
とくとくもくとくとくへ通じ
うちせひたるはとくとくとく
義とくとくとくとくとくとく

人ハ小シシ詞シとえシて思シ
歌ハとシむね、真名席ミナセ云ハシメテ詠詞イニシヤ
之シテ急斂流泉如涌モツウハリ、寶器ハラタケ為ハシメテ
之シテ花孤掌ハナハラシナリ、いそんや妙はま
寄ハシメテり爲ハシメテのよひ
とシれシ入ハシメテるシうらシるシるシ
申ハシメテり月ハル與ハシメテよせシ
まシとシ候ハシメテ詞シとシくシ
がシよシとシきシしシれシすシ
元ハシメテすシてシ詞シとシくシ
もシるシよシすシとシあシ
詠ハシメテすシてシ詠シとシくシ
てシすシれシひシなシのシもシ
竹ハシメテとシぎシとシいシとシ
也シん物シのシ物シとシ見シるシ
云ハシメテすシてシのシ詞シとシくシ
風ハシメテせシとシ一シをシかシとシ
キハシメテまシとシ斗シとシいシとシ
すシすシ重シのシ歌シとシしシ化シ
はシすシ坐シてシすシ人シとシ

をもあこゑしむやくまく
書寫序云譲近人耳義貴神
明セシムよ人ノ耳ヨトク
トムシムシムキテヤ意ヨ
アリモトニスコトレミト
實ムモトモニシムドモア
ツキ通セシム奇通一耳目
モリモヒト威テ教誡ノ端
ノリモカナキハマニ波のうす
ゆきとおゆふと
九字ノ理をえうて思ふを
ソノのう通うり波往るわん
たがとよくかひふとくま
庵うねうと一萬集は
んをえうてよし羽とくま
まうり波の手の羽とくま
あくわくうり手とくま

萬集云

酒通余我身れ伊代天乃依羽
翁

後でせすよもんを修む
あらゆる事あるとてす
とくに業事されてもうる
陸奥そゆき皆傳とめども
傳てくは背説とめども
うりとも首んすうんとまの
説きうち考はせとんと
もん中ふくへと一筋
うつしもくわく今更づ
きていんが傳せた人の後も
れをもひて今もくはじめ
傳すよわくまく
向ふあこられまほせば
なよ、あくよすもわくとく
よりときまばらかの家は
ひきうちく下とひぬくらむと
うつし教説の通じし辛苦
くり人へ年月とておひと
うて往々教説の端末用ひ

やはうとせり。アマサウナア
アミタの事。アマセウヤリ又
アマセウ家。アマセウ道。アマセ
アマセウ人。アマセウ事。アマセ
アマセウ。アマセウ後。アマセウ集。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ集。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。
アマセウ。アマセウ後。アマセウ後。

首
おとづれのとて初とぞし
直ちに方舟は今せやす
あくまむと後りよみが首れる
黒ひら風情詞もとこれせのと後
そとと是ゆるは
萬川あまく流れゆひのん
しわらゆ時々ゆう
等はの百家雅語とてあま萬
とくやれゆうとひゆう
とくとくとくとくとくとく
と時々あらうとひゆう
あおひらしくひゆうとくとく
ほりてんすとくとくとくとく
の時々あらうとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとく

年鑑集

のよれゆつまつたれのうれい秋
葉と一三行をもと

八月の夜とくとくとくとくとくとくとく

先ゆくとてあらきとすよゆる

うかへ月ばかりとてあまくま
そよごれむ心くとらむてさるをも

うらむとぞうへりくさん

もひうくわ背すけつされぬ了

もぐく人で賢思はうくもすへ則教

えへ賢思はうくもすへ則教

誠の爲せよとゆう下すは

世道とよきうきとよしゆ

同く辛いねま詩流のたまひ

あもくふ教誠の爲めのまへ

漢家れ好ひ和國の辛れや詩れ
風月狂之うて教誠をしむと
せんいとく辛くや

善云君ひ天下の火事もまじめ事
一うて圓ひ益わくひとく事

かしづりゆて論語云々益

時徒不言、聖主を益申ば
以あはるのとおりに賢臣

又文益ひもまじりの詩、正義云

文益は、賢者不復作詩、上

又云欽植者文辭賞善罰惡也
之後李復霸君不復賞罰是天
下之潤記絕矣縱使作詩是益
益歎賢者不復作詩矣是
八家朝聖而國無たり民力為益
人無所用以橫道也其後
失其事付之人口而令食之
名子也過のとくいりひたあくは
又詩の德とくの僻事ばらじけ
やとすうね益うる時賢者詩
をばくくもとをア

文集云伊詩贊含炳戒諭者雖
舊雖難株而獎之碑誅有唐
美悅詞者雖等雖多嚴禁而絕
之之教誡久焉不可謂之
や往日凡詩のとくとあくと
詩の通のとくとあくと時の事
をいふ文集云懷菴祐卿生於
輓及害穀者也詩多庵生於
於父及復父者也又貞觀政要

第二云住賢篇虞世南行操
取之以移近草戲作一詩頗涉
洛艷世南進表諫曰陛下之作
之城作雖工駢非雅正之所好
不必隨之一行恐致凡靡輕
薄咸俗非_斯國之利賜令諱和
敢不作而今之後更可斷文
繼以死請不奉詔具報誠若此
服用善焉詩已尚實_無爲
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
叔真名序云大庭皆以艷為譽
不知詩之趣_也不知今所經
序毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

てふるのうんと云う

いよりうまれぬのやを今猶存
ゆけりの前のゆづくが道をま
わきゆかともえりぞれに
の朝秋う月の夜ゆよそすな
ぐくびうて時よはまうすば
さむらぬわものぞとまふそ
なむきくすゆぬしれぞと
よどひのれづかとま
寝とまふと

橋吸ありもまほまゆまと
あくとくねたとくもつ
わらへ月缺かよとあくまく
よたうくは

クをふゆとあすの月待と
んくかとく

そてくほん居てとうとく
うちをとくとくまんとく
達不達の善惡をかゑをとえ
考の善惡といへ實あるずを

のふわふわとはまくとひば
りひてこすりほてひきり
まくはるまくとはまくじる事
そひわくうせ

かぢかゑよふゑよまくの
まくもてありひじとまく
ほくもひじのまくわくと
らうんじまくけは

お北寄くまくわくと女被ち
ときよ化清もく千代ハ千代と

ちと南流よほ千代がまくと
ほくは流はむかひぬまく事陸
國よわくわくじあくと云ひ日麗
又云伊斐詫伊斐用尊は國と
いふ御ねく時ホシモレ
ほくはくりじてりり
つまくはまくは年紀よが築
はくとあてまくとおとを文
刻書もく書陸國よ筑はく

もくとまくとまく常葉集

多々といはるる事多
ゆきとよきとよきとよきと
傳云はしと大富人皇山也
宣れ角もとても未だのれ
破の在節ゆきうり一の鏡はど
もくすぎ事すうのまを序云
仁流秋はれの外流もよ射
て惠能はひの陰りもよ射
とくに黒もとてゆきへ大工と
くやもとん大富人皇と云
りうる葉云
絶はれの岸より有る處の所
あそつてて國と或す
もくらめよとくにぐくよのり
山相の山
うれしとく行はしとく行
たとゆきとよきとよきと
ゆきのよきとよきとよきと

東泰山衡山花山恒山嵩山

傳云絶はよんが國と云何

りうる葉云

絶はれの岸より有る處の所

あそつてて國と或す

もくらめよとくにぐくよのり

山相の山

うれしとく行はしとく行

たとゆきとよきとよきと

ゆきのよきとよきとよきと

富士ノ煙ノ中也第三ニ一
身の少くはるゝ源わゝは水
朝ノ日れ元よりひらきて氣
ひりり煙のへるんや數せこ
えり一音云首竹取尋と云ふ
もとを竹ノ木に萬葉と云ひ
てよしもとらむいふとす
まんじもと萬死より夜
そぞりいきぬとてわら
うむむの音もよ聞ても中小
一ノ月るれ中よりんりゆう
かふありもとをやうと
はくくてくくけり行の間
にうひあよせよたのれ
このれのんりをとまほよと
善りをり下察てよ下
りともしはすよて心とば
まくともには時の拂つては
まくともはまくまく

清きよきを下卑れまんと
算にそよとがひて帝くよ
よんのよくゆてまへれを
みそのりすよりぬるをと
うみてれりのありま
きわめてえくをとま
せあはすとまれもあら
まくらへまくとまそねま
たひよそはまくはま
もてまくとまのゆき
れりくよおほり
音くまくすて種とある
れりくよおほり
音くまくすて種とある
れりくよおほり

危ふそぞりぬるをとて
ち秋の風とてねのさうは
いよひへくは
かくともぐくがたにえま
みてひのれくせむすん
わくやあらわくかみのね
うきえりはくのね
高歌とほ山のあくは將議集
用尊れ御時朝のよ砂うち
わくしほじとく朝とく海と
えもせ仕古^ハ持は國仕古^ハの御作
の御仕下りすへるはりひめ
とく日年紀の藍^セととあると藍^セ
はん^セととあると藍^セととあると藍^セ
は箱の下^ハのひくす^ハの藍^セ
アシキシテシテシテシテシテシテシテシテ
み音^ハ仕古^ハ明作^ハ仕事^ハと^レ良^ハ
仕古^ハ明作^ハと^レ時^ハ
四^ハと^レよ枝にしるす^ハと^レ時^ハ
明作^ハと^レひくす^ハと^レと^レ時^ハ

まよときておまのうとくえ
一美ちのはにそひておひ
くすむとせようとあひ
まくらよまこととも變す
おのとおひとをかね
えれはくえとくすり
かんくえくすりとくすり
おれいわせゆく
せんぐくすりとくすり
れどこのいはひがて女郎と
。一
そくさくとくすり
今とくえとくすりとく
まゆ時とくすりとく
女郎たとくすりとく
男とくえとくすりとく
村の節とくえとく
わくとくえとく一時
ぬの寺とくえとくとく
聖武天皇御時後葉の字

明神ノ御託宣は聖武の達焉
東山寺の大佛也もんと仰迄
宣ももも山城國男ひよにを
ひそみてうそをもとり人情明
神のまじゆもんかし、猿山
とえぞれ八幡のたゞ海にし
とくとく、思ひの音ひきりあてと
は八幡山を男と云ふ者有
懐慶の國の女ももすりもす
とく男とくももすりもす

あもせて二人男談らして一人と
おは國生殿東の側には元
のまよひのうからひき
今一人山城國した八幡山よく
生むてねうひくねよひあ二
人の男娘もしくしてまゆをかた
きてぬくわくくはよ一人生
男娘のくわくわくとてもの
わゆまとやそ地獄をもるゆ
とうふるけうまことせとまう

しこ人の八幡山とてよもひひうち
もじまくすりてあてひだ
か男のわとて男山といふと云
ふとが女、神とて山崎の開戸
院よ開戸院明神といひけり
角流。ははも主と御守貞觀元
年已卯移守作主八幡於男山
田中年未始置は社前南信安
任具職とて主王代也續れ

男のれふとて女あれとまに
あらうがふれと男のれどもれ
おはせ女あれとまてたと
おはせと男のれあらすけと
いはれとあらすけとがま
おはせとおはせとゆくとがま
おはせとおはせとゆくとがま
わわむたとんじと
うむえいとんじと
てとととと一時とは女の
うとととととととととと
はうとととととととととと
せ女あれとおはせとおはせ
おはせとおはせとおはせ
おはせとおはせとおはせ

りも、いきとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
女郎花と書いて女郎たるゆゑ
大唐の漢代の王侯貴族
より物といふと何文はと
佳女とひきり姓の姓をやうりも
つけれどもこの墓をと
えはしてまことにわらわの秋の
ワ言じゆり佳女娘の墓のあり
方じよすてか娘の墓の隣
てそそりとんてうてんとん
よはりとてこは女郎花漢
とくとく一石の碑よせてこそれ
ともこれをとみやうとんぬい
ハ女てうちのたとて女郎花と
説せ女のとばへじとととと
のとばへくらと使ふとて此女
郎花は女とあるとて
入まつたまわらあはれの夕な
水車のゆづはさく

せまのむすは地家の元より月日
すとま三月ノカ功の月ハ正月也る
ゆよりなき一日のもてうづれ
りたとてはすが、あざさ
あくとてもとこ物を極めうて
ゑひもゆふあどる

鳥鶯はよきわらひとれをまし
正月も二月もとく月もとも
九月のそれ朝といさん何うき
えん秋のうす射さんかすはま

まつは九十日ばかりいはとれ
ともれりあ時とてもくまく正
月の事はまくとく事とく事と
今ぐくもんの日ねとくとくや
朝もれりのあん
せうれんとがよるまく日暮のす
なは三月まで以てのすよし
うちわと朝もれ風と便り
も五月もはらへりとくとく春三
月九十九朝ハ朝る之全量

萬葉集は書く秋の夕地家
九月の小雪あれあと使ひ
通うてハ草もゆんあまひ
幣ともぬて林へりゆき
南家よなえ九月をあつと
林の夕ゆきまへあづり時そわ
てとよす
せはるふ物もあらまめり
秋の夕ゆきとよすとよす
八月の夕月と云則葉落月と書

お葉八月より九月に及

月をよみて秋の物也

わが年もよしんのよしんやもと
はよしんす

魚食也もりしよしゆそひ
時もとてよしむよりかど
じもとよしむやよしむ

後のりよしむよしむ

をのほよしむよしむ

鳥羽中日午紀よしむ

老の度額てよしむ

草のあうてほとんてかあとやもと
水のあとよもと物とよもと

歌力と草小をよもと

あれほりはとよもと

よもと行もたのよもと

よもと行もと

せすに行けよもと鳥川

まつする國をしる所

まつらむとひきく

じりんぐんを今が見よる

わきうるみのあらうるふ

朝食と云ふ二本もと一石の

國吉野山の躋へ一石の絶帝岡上

色を朝食と天智天皇せにまく

はすとての絶る國の朝食

ひの木に黒まれ尼僧とて首の

毛髪と切れて住むうる民

をまくわくすんうをそしよ

まゆうすり時日んほむまく

かへんのとくとくのえなあはうと

かくとくまくとくとくとくとく

おもげく行ひまくこと

ももくと帝とれ御即位の候

大嘗會の在轉不と黑耳食け

まくとへじ倒ぞもくとて身

凡歎よりる事無くすをす。後
吉宗よりは養うて假て免官す
うちも國へ仕とうべし時
は例より宣示れ候ひて仕
候事ハせぬもすて朝倉は
としひよりは朝倉のまゐ
え寺へ詣あら朝倉を
わふねじもほとしけ
らとまでわざへんと
まのねじにかき
おぬかはわざくらまなとば
ばつて使わるる事也他家ま
りこゑもとて後怒の事う
せの落第深夜致りまねも
いふか女はひてわざれ
西うかり女は云ひてわざれ
かん時もまづうらう事も
ことなりてまづうらう事も
かくまとてうれと女がい化て
いはまじくはじめむ

わざとふらんとおひで行り
いまとりつけてゆると海
はなわたりてりくわれぬの
ねのすりさんとねのまや
く小えとすとほんとうりに
くでよんのかくはりとせば
とてむしゆきゆうりせば
と男の後りうるそんじを
とすうてまはるはるはるを復
浦道くわり半吉はるはる
まほへはるこじとそん
山ふとう

節守れと水

いとくの節守れはるあらと
とものとわくとそく
かずれをはすと二番と一番と
景行天皇れ沖縄夏の悲鳴鷹
國いさむをとけりとまをと
時と節守りとまをとばと
ゆづりとまをとばと

わくはまよすすまゆるすま年れ
えりけりへ時入まくもま
のてまくはまよすすま
まきは重てぬづきく夏
また御くはれまくひと
まくひとまくひと
せくの後とこまくひ
懐度圓はらり男女はゆひ
て住むり道よいもむゆれ
せくふくとくの圓行て

秋の年月はまく
首へはまくとくまくと
あきて野とくはなとく草
はなとくはまくとくとく
とくとくはまくとくとく
林くとく下とくある

秋森り下まく今もや
ひまくとくのまくとくふせん
等の色どひとはとく
じやねの色とくとく物とく

ひるみをすくはむかへ
ひるみをすくはむかへ
鳴草やまも木の晴は嘆物ひ
くふとしと新秋一葉詩
曉露底鳴花始發
万般舉折一時情
曉の香すくはむかへ
地獄有すくはむかへ
曉も鳴れむかへ
君の生む夜はすくはむかへ
もえり寄よるに仕事と車
れりけども仕事と車
男りひきよるを女よるとも
て物ひきよるはれよる夜
半て寝よるを女よるとも
主ひと男女ひきよるはれ
せうれすす十九夜度より
とそよ明日重音よしは
じ男の記憶死りうてから
はるかにうらましきりよる

こもれきをかじておひでよし
と度てしておのれのぬをあつて
まうり時後りすともひやま
してかみまこと後りすとすと
在ひやそらてくわくわくは
いよもゆるの度りと
わらべと手のうねじよし
やまねはとよとけと手の
うねじよしとよとけと手の
せすれとすれとよとけと手の
洛きや下りや下りて
ひきこもれとひきこもれのうめ
けと景や下りてとよとけと
一ひきこもれと下りて
まの浦とさりとととととと
證奇集今日れ暮れとととと
をこれくわとととととと
言てもうりととととと

晴れや秋のあらわし

一葉云是竹とくと是是竹列

是は源氏ノシ緑をはぐれとす

色葉よは黒眼と言へりとす

後ノトコロも黒圓り牛の

人とははと黒角とす

車内をひきてせせにけふる

前羽立す

節川ノシハスヘヒツカニ

シテシテシテシテシテシテ

流てといふせむひすにわる

節の川もももももも

老野川ノシハスヘサシ

今かゆれゆく煙草をもさも

もじゆるうすとすくそひのく

うゆゆくわからり

もひきしりほんすとくまめ

をくみゆれひやうのりやすか

られ様よな（よるに煙草を）

舊もほの後さればひま
といふれどもかくも爲
めりかと後をうそりとす
ひすよての所厚と云ひは
はまちと長柄焉つまつに何事
もあらじと云はれておき
やれ今へる事もあらじと
いとも後より平よつきて
事もとれどとぬの雨も今
ハ始やく事もあらじと
被とましゆすゆすゆす
やどらとましゆすゆすゆす
後よりたゞと詩裏凡よせ
やどりてとましゆすゆすゆす
はましゆすゆすゆすゆす
同上とすとすとすとすとす
とすとすとすとすとすとす
いん中へ傳ゆるもや
益もとぞとぞとぞとぞとぞ

半島とあつとそくとすとせ
ん波風とよそし難いとるも
何う様にはうえ今が事あ
行なうんとすとせ伊豫衣
中勢の氣きうんがまは半と
うきよのとそそくとくと
ぬとおれりうら様とれわ
れとおんすとゆうと海ま
わとおわとて震風を云
く首筋をほうひ筋と
大方へきますゆすとくまん
能とすてやうととてなひ
てえんくんと氣きとくとく
くもとくとくとくとくとくとく
葉平朝とおれ
とめとて降風とてゆうに
くわうんとくとくとくとくとく
おけんとくとくとくとくとく
傳すりとてむとくとくとく
うそくとくとくとくとくとく

あらひいはしらすいとる
にまつたほりけたりる方
今とくにわらひや位屏風
障られずお月さんとてお歌
よへててましむしらじとす
うてふんじてまくはまくは
相も解るまくはまくは
下もあそびよせてもやくは
回をまぐれ煙のねと長柄扇も化
うちとすくすれたのを風の
風とわ。人をまつて煙も不
といひもくの煙もまくとす
人をまつてとまくをひくと
えまくの煙もまくいはくとせまく
もやいはくと正直のや
蓋もく不斷不之間をへ袋ふく
不斷とくのやをくく煙の仁和
寛平のゆきじ風それ煙の
うしゆもすよ後つゆめ
うしゆも不断とくで今の箱

とてとまわらひよる
わまうすとんぐれんす
ゆゑを画すとひと筆
の初よとく考へ過渡
なあはせや

畫家よ不立と筆へ

うきの實ば以て筆と
物ととぬ付さざるを
ありませて不立と筆へ

之者す少しでは及ひも確と
うしりうめえむるを不立と書
うふを角とて不立と書へ
ともよきる間とてんて今へ
筆そり極もまじは長柄筆を化
とすへ辛より一説ありて
んて應すりとて不立と書
それゆゑとてんてんてん
仰ほしは角流よほまとて
かく長柄筆を代家よと書

主教今ハ長柄作と云物りあら
も化り音半はひどくの
はの回りあるての傳はせ
しなまかに往ふよと
まちとあらううめられたりよ
きしするあらわに傳はされ
へまううを物と申され
今ハ氣あはれなまうを物と
成りとてたまと傳はる事
そぞやくよ

りう代へあらうて傳はらひて
ほううはまかまくのん
とまるとまくのんとらひ
けうへしもと大和物産紀有
まう事も

苦アリんやうての傳は
りの法うこうじまくと
せうの法うこうじまくと
せうの法うこうじまくと
あらはあらね作と

おもひよひき

はの國りもくに移すじよと

とはかかを行ふとん

おきは隠すをもつもく

久き傷わきありて化る

そくかかわらぬほれ

りりりりあらむかよひまつる

精わき化るをとて而

今うとえ

うれしきれ傷もまそ

はくくくはくはく

しらせ傷とけよよよよ

よよとせ傷とくく

ひくえつやく首ひく

傷はきよとくかじよてよ

らきりげく時それよま

みくらうりかみはりて女あさ

てよくおしけくまく移すよ

くさん人びとを物とまつばと

まくまくやとえよとせ傷も

人へゆき海をうん重てたんと
みてとかかはるておはなは
すよへてねそそりと嘯歌
をはわり男いふるひ行てま
まくうるるんちんくわらわ
まくうるるそめりむうる
まくうるるそめりむうる
車はよしとがひとてとて
物もいふるそ男噭えを
そそくんとまくは後り
物のまくは馬のまくは
まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは
あくはせ男達アソんとて馬
ナアテ送アソリ通子雄
呼名とて馬込をとて沙男
雄を射死てアリ清毛てはの
よりなり
物のまくは馬のまくは

うみのまへりとまよひ
とほりよりはめ男守て物
もやうむすりてともあらひて
まよひやいとくもせまの
やの雄ゆきいとゆは
とりてあそびとお長柄橋と
えやハ村は國川尾と云ふやうり
里^{六町}の内^{三里}にて海島^{八海}
よりゆの市ひとてりへ海
のへてまよひと三里よ橋段
まよひとまに天皇を御時
まては橋ばまんとさへうと
船くろしん橋の明神をま
守護神を祭とすとま
於よくかくわち時事れつもと
まよひとまわもとけりと
問云うれふわもとけり
まよひとまわもとけり
答云とれまわもとけり

雖云後邊添りや御内テ山
先てまわづ三里をくまづ
さすはあへぬ鷹と云ひ段定の
大後鷹山城國也行もすり荷は
因の銀はるわら鷹をくまづ
体勢り、筆も難はうりき
れ鷹と作うりと語りは大後
鷹うち山城も定つて鷹と
ありづらきとてこそふ今
の筆もと段定を山城國也
造てまし今のかず難はうる
長柄の鷹もけうらうとよひ
今のかと段定象りすとお達せ
るもとくはるふ今ハ首
のくわくはくはくはく
段定の鷹山城國也行はる
もとくの鷹と作へと後もと
ぬよ長柄の鷹ハモヤと他家よ
ハ多もとくはくとえく

此手い

益々山取いしれり。こゝのもの
中へ皆あつてゆき今れあう
不ハ化すうりと云ふと云ふ
もとよりはまづはよのすゑ
を云すも尋常れ淺えりも
毛目山さんとひよとほ常陸
國よりとくも春大明神
あわ岡山角とくも春大明神
神のやれ沖在山のあよきて
とせ山さんと云ふう

朝倉の筑前國上毛野よりと
いふとぞうてんじふすまほ
ゆつうしとく野山とお庭等
大和國の表野の算うり松浦
朝くのあらわすとお庭等と
えとく人處よお野山とお庭等
をうつしとく野山とお庭等
うえよつみておわ岡山行とぞ
祀りた大後仲平云ひとぞ

と傷つ山にまかんまゆも
さうすらむにうへども

やいひゆす小

もあひれを節りよる筆もま
まきとあくまきとあくま
をほりとも日半國を節ふ
せしめしの筆をさひあて
あらうの古節わざと白毛
まくはの持は圓て長柄ノ
けいじ傷つと今山城圓れ

定よ便せりこころやの在下の
きよみていくんやくくろ
へとくくへはの圓て長柄も
えいそわとこも南時とて傷ふ
くやうもれがて下の傷て
もしよひひうり山城圓れ
定り大傷うりもと二方ノ作
んハシモマムラヘスアリテ
ねよ喜流もは長柄傷も作す
ヒミト

